

子ども会(学習会)だより

MY SKY No. 26



1997年11月25日火曜日発行(毎週火曜日きまぐれ発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責: 吉城正士

私は、大学生時代に4年間ファーストフードのマクドナルドというところでアルバイトをしていました。そこで学んだことは本当に大きくて、たくさんあって、それは今でも私の生き方に脈々<sup>みゃくみゃく</sup>と息づいています。そしてその記憶や思いは、バイトをやめてもう10年にもなるのに、不思議なことに日々思いだし、膨ら<sup>ふく</sup>んでいるのです。

ハンバーガーやフライドポテトなどの製造<sup>せいぞう</sup>はもちろんのこと、カウンターに出<sup>で</sup>ての接客<sup>きやく</sup>、子ども相手のバースディパーティー、厨房<sup>ちゆうぼう</sup>内の片付け、フロア清掃<sup>ゆかみが</sup>(床磨き)、ガラス拭き、2時間ぶっ続けの洗い物、何箱分ものレタス切り、零下18°<sup>れいか</sup>での何時間にも及ぶ資材搬入<sup>しざいはんにゅう</sup>、男女関係ないトイレ掃除<sup>そうじ</sup>、早朝<sup>そうちよう</sup>のピラ配り、庭木<sup>にわき</sup>の剪定<sup>せんてい</sup>、駐車場整理、店内備品のレイアウトなどなど……。すべてが新鮮で楽しくて、「働いている」というよりも、「楽しんでいる」と言った方がピタシ合っていました。

そんな体験を通して今の中学生に望むことがあります。それは、「掃除・整理整頓<sup>そうじ せいりせいとん</sup>ができる」ということです。おそらくどんな社会に出ても、これがキツチリできれば、大きなメリットになると思うのです。また、今生活している環境(教室も家も)に細かく目を向け、その環境をどう整理整頓し、美しくできるかということは、大切な能力のように思うのです。環境が人を作るということはよくあるものです。その環境が粗雑<sup>そざつ</sup>なものであれば、どうしても心も粗雑になってしまし、逆に整然<sup>せいぜん</sup>と、常に真新しく美しくしていれば、心も豊かにスッキリするのではないのでしょうか。またそういった日々の積み重ねが、性格として身に染みつく<sup>しみつく</sup>と考えるとどうでしょう?さて、みなさんの身の回りはどうですか?

話がそれましたが、他にも変わったところでは、ドナルドショーの舞台設定<sup>ぶたいせってい</sup>やそのアシスタント、また付き人<sup>つきびと</sup>をして香川や兵庫まで行くこともありましたし、技術を競うコンテストにも出してもらえ、県外に行かせてもらうこともありました。

そんな楽しいこともありました。ときには過労<sup>かろう</sup>で倒れたことも何度かありましたし、重い資材<sup>しざい</sup>の持ちすぎで腰<sup>こし</sup>を痛めたこともありました。冬の雨の日に、ずぶぬれになりながら2時間ぶっ続けで旗振り<sup>はたふ</sup>をしたこともありました。

そしてこれら体験の中に常にあったのは、仲間との絆<sup>きずな</sup>でした。どんなときも仲間がいた

から笑顔で頑張れたし、支え合うことができたように思います。バカなこともしましたし、悪さもしました。時には家庭内や友人のことで泣き顔を見せ合うこともありましたし、無謀な社員の要求に怒りの抗議をしたこともありました。そんな仲間が、今では四国・関西のマクドナルドで社員や店長として頑張っていますし、他の職に就いて県外に行っても連絡をくれます。本当に有り難いものです。

このころの仲間も、私には大切な大切な宝物ならぬ「宝人」なのです。

☆ 吉成子育て奮戦記～お宮参り編～

サッカー日本代表がW杯出場を決めた明るる日、エジプトで観光客に対する無差別殺人が行われました。いたましかぎりです。他文化・他国に対する無理解が生んだ悲惨な事件ともいえるように思います。またそこには、宗教間による無理解もあるようです。

今年の夏に発行した「MY SKY 14号」に、子どもの命名について記しました。その後、「お宮参り」に関して家庭内でちょっとした議論があったので、そのことを通して、宗教について考えてみたいと思います。

「お宮参り」とは、簡単に言えば、産まれた赤ちゃんを連れて近くの神社にお参りに行くことだそうです。「それがどうした？」という感じですが、そんなことをするものなのだそうです。たぶんほとんどの生徒のみなさんが、知らないうちに体験していることだと思います。

その時に注目すべきは、子どもからみた父親の母親、つまり父方のおばあちゃんに抱いてもらい、神社の鳥居をくぐるものなのだそうです。私は、子育ての一番の貢献者である母親に抱かせたかったのですが、それはダメだということです。どうしてかというと、赤ちゃんを産んだばかりの女性は穢れてるから、穢れてるような女性には抱かせられないのだそうです。

そもそも日本には、古来より3つの穢れ意識があるといわれています。一つは「出産」に対する穢れ意識。二つめは「死」に対する穢れ意識。三つめは「血」に対する穢れ意識です。実はこれらの意識が、いろんな形となって私たちの生活にいきているのです。

例えば、お葬式に参列したことのある人なら知っているかもしれませんが、お葬式が終わって家に帰るとき、玄関でお清めの塩をふることがあります。これなんかは、「死」に対する穢れを清めるために塩をふると言われていています。でも、考えてみてください。本当にそんなので清められるのでしょうか？また、お葬式って穢れているのでしょうか？「死」

って本当に穢れたものなののでしょうか？

これと同様に、「出産」と「血」によって穢れてるから、赤ちゃんを産んだばかりの母親は赤ちゃんを抱いて鳥居をくぐれないのだそうです。変な話だと思いませんか？何の根拠こんがあつて日本人はこんな迷信めいしんを信じ、頑かたくなに守ろうとするのでしょうか？こういった科学的根拠かかくてきこんきよを持たないことにこだわってしまうことが、頭をかたくさせ、それがひいては偏見へんけんへとつながり、何の根拠もないのに人を差別してしまうともいえるのではないのでしょうか。愚かなことですよ。出発点そのものが、あやふやで確かなものでないのに、それから出てきたことは頑かたくなに信じてしまう……。

私には、幼い頃おきなから宗教による大人の汚きたないがいみ合いを目の当たりにしてきた経験があります。他の宗教を信仰しんこうする親族しんぞくへの冷酷な陰口れいこくかげぐちです(これははっきり言って「いじめ」です)。それは、今まで守ってきた我が親族のお墓はかを守ってもらえないことへの切実な思いがあるのだと思います。でも、だからといって、先祖せんぞをいい加減かげんに思っているわけではないのに……。 「先祖に対する思いの表現方法が違うだけなのに……」と思うのです。

そんな親戚関係を目の当たりにして育ってきたためか、いろんな宗教を信仰している人と話すことに興味があり、たまに家に来たり、街角まちかどに立っている布教者と長話ながばなしをすることもよくありました。その結果、一つの宗教を信仰するよりも、すべての宗教を理解できればと考えるようになってきたのです。

近年日本人は無信教者むしんきょうしやが多くなつたといわれていますが、まさにその通りで、何かあつた時だけ「苦しいときの神頼み」とばかりに拝んだり、年に1・2度思い出したように拝んだり、挙げ句の果てには、何でもかんでも拝みだす始末しまつです。そのうえ、熱心な信者に対しては、数奇すうきな眼差まなごしをおくるような風潮ふうちようがあるように思えます。おかしいとは思いませんか？

今、日本の町々に残る木々や自然は、神社やお寺などの宗教によって守られてきたと言っても過言かごんではないし、その傾向はより強くなってきているようです。事実まちなか、町中を高台たかだいから眺めると、まとまった緑のあるところは、わずかの公園か、神社仏閣くらいです。日本人に宗教を信仰することをすすめるなんていうおこがましいことはできませんが、せめて、古来から大切にしてきた緑くらいは大切にしたいものですね。

また先に述べたように、人の心を救うための宗教がもつて無差別殺人が起こるようなことは、絶対に許すことができません。宗教戦争もそうですし、宗教の違いで結婚ができないなんていうことも、おかしいと思うのです。ましてや、宗教で就職ができるとかできない

いということもおかしいですね。真の宗教には、他を<sup>はくがい</sup>迫害するようなものであってほしくありません。むしろ、宗教を通じて他との違いが認め合えるようなものであってほしいと願うばかりです。

今回の「お宮参り」は、両親の理解もあり<sup>なご</sup>和やかにすませることができましたが、これからは生活に根づいている「おかしいこと」に目を向け、少しずつ少しずつ人権意識<sup>みが</sup>を磨いていこうと思います。



今週末、全国同和教育研究大会に参加するため、九州は熊本県へ行ってきます。帰ってきてから、その報告もできればしてみたいですね。

また、来週からは板野町解放文化展が行われます。中学生のみなさんは期末テストもありますが、暇<sup>ひま</sup>を見つけて、町内のいろんな人が思いを込めて作った作品を見学してみてください。

なお解放文化展の<sup>いっかん</sup>一環として、6日土曜日には、板野中学校の生徒も発表をします。文化祭で人権劇「教科書無償のたたかい」を演じた1年A組が、今回2度目の公演を行います。A I テレビでももう放映<sup>ほうえい</sup>されていると思いますが、ぜひこの機会に、生の演技<sup>なま えんぎ</sup>をご覧になってください!!!



- 11月25日(火) 1年生合同学習会(18:00～; 総合センター)
- 12月1日(月)～7日(日) 板野町解放文化展(町民センター)
- 6日(土) 板野町解放文化展講演会(13:15～; 町民センター)
- 14日(日) 南公会堂まつり(南公会堂)
- 22日(月) 終業式



南公会堂祭り (97. 12. 14)

同和教育講演会録  
『私の歩んできた道』

それから二十五年後、再び故郷で自分の娘が旅立ちを迎えた朝のことを、詩にしておられます。

長女は、念願の大学入学が決まった進学できる喜びと未知なる生活への不安で、錯綜する心を抑えがたく、落ち着きなく諸準備に追われていた一家はみんな浮き足立っていたしかし三日前のあの出来事が、私の心を暗くしていたそれは、大学合格の通知が来た後の夕食後のことである突然娘が言った

「お父さん、ここは同和地区なの」  
衝撃が私の全身を走った  
いよいよくるべき時が来たと感じた  
愛する可愛い娘に言うべきか言わざるべきか、今までずいぶん迷っていたこの娘だけには、かつて父が私に言ったようにには言うまいと心に決めていた果たして言う必要があるのだろうかもし言ったとき、わが子はどう受け止めるだろうか

そのことがいつも心の中に刺のように引っかかっていた  
娘の同和問題に対する足腰の強さを疑っていたのである  
しかしその時はついに来た  
「それを聞いてどうするぞ」

私はイエスともノーとも言わずそう答えた

私の精一杯の答えであった  
娘はしばらく考えていたが  
「お父さん、私は負けないよ。ここがお父さんの故郷なら私にとっても大切な故郷よ」

娘の身の上に、今になって何が起きたのだろうか  
私には語ってくれなかった  
だが想像はできた  
娘は、愛しい娘はかつての私と同じように、差別を憎み、苦しみ、耐え、怒り、闘っているのだと感じた  
力いっぱいこの両腕で抱き締めてやりたかった

それっきり娘は私に何も聞かなかった  
私はほっと救われたような思いがした  
娘を仏壇に誘った  
仏壇に明かりを灯し並んで座った  
そして、亡き父から受け継いだ一刀の短刀を娘の前においた  
人間の価値は人間が決めるのではない自分が決めるものだ  
生きるということはそういうことだ  
「人間の尊厳は家柄やお金ではない。もしお前がここで生まれた父を持つたことを恥じるなら、その時は父のこの愛刀で死ぬ」

「この短刀を父と思え」  
「故郷を堂々と語れる人間になれ」  
「父の、そしてお前の故郷が語れない時は、自らの命を断て」

そう言つて短刀を差し出した  
娘は何も言わず短刀を受け取り、祖父の位牌に向かい合掌して、仏間を出た  
一人になると涙がとめどなく出た  
胸が張り裂ける思いがした  
私の解放への闘いは終わっていない  
いや終わりが無い  
こぶしを握り締めながら私は泣いた  
二十五年前私が旅立つた同じ駅で、娘を見送った

娘の顔には、数日前の不安はどこにもなかった  
晴れ晴れとしていた  
並んで故郷の山を見上げた  
「お父さん、私は決してこの短刀は抜かないよ」  
娘はにこにことして言った  
私は誇らしく思った  
娘に負けまいと思った  
春盛り、娘の旅立ちの朝であった  
私が生まれ育った故郷を差別することを許さない  
差別する人を許さない  
何百人何千人もの先人たちが差別を受け、職を奪われ、職を制限され、故郷を捨てざるを得なかった人々を蔑むことを許さない  
貧しさのために無知なる人を軽んずることを許さない  
いつも目立たないように、人影に身を置いて控えめにしている人をののしることを許さない  
されど差別し、軽蔑し、蔑み、ののし

る言動は許さずとも人の世に人間の尊厳と人間としての熱と光がある限り、差別する哀れな人を憎むまい  
友よ、人間なる友よ  
共に解放への道を一步一步積み上げていこうではないか  
ふりあげたこぶしを勇気に変えて

以上詩の紹介を終わります。  
私はこの詩を読み、その先生という  
いる話をしながら、たくさんのものを  
いただきました。人の幸せを見て自分  
が不幸に思えたり、人の不幸を見て自分  
が幸せを感じてみたりという生き方  
でなく、人の幸せを見てそれをバネに  
して努力し、自分の幸せをつかみ取る、  
人の不幸を見て自分のこととして悲し  
める、そんなゆとりのある生き方をし  
ながら、自分の一生を終わりたいもの  
だと私はつくづく思っております。  
本日させていだいたようなお話は、  
言いたくうれしくて話したのではあ  
りません。むしろ他人様の前で言いた  
くない家庭内のこともあります。しか  
しこの問題が二十一世紀に残されてい  
かないためにも、取って話をしてまい  
りました。人間が人間として住みよい  
社会を、住みよいこの徳島県を、今以  
上に皆様方の力で築いていただきたい。  
そのことをお願いいたしました。私の言  
葉を終わりたいと思います。  
ありがとうございます。

おわり